

## 二柱の天照大神と饒速日尊 神代の三つの偽り、天津日嗣と天の岩戸籠り、太古の神々の舞台 前編

出口 恒

### 第一の偽り

天津日嗣と開化天皇

本論者は神代の三つの偽りを聖師のお示しにより検証していくことを目的とします。

開化天皇を知らずして『靈界物語』を読んで判るものではない  
『開化天皇と靈界物語』新月の光 上巻』。

穴太の産土様は稚日本根子彦大日命である。若き日本の根本



モンゴル草原を行く  
王仁三郎聖師

大陸から全世界に施すためであった。昭和四年十月、再度の朝鮮半島、中国大陸への巡教は、火の洗礼の大神業を本格的に断行するためであった（「聖師再度アジア大陸

へ』新月の光 上巻』。

火の洗礼を行なうとは、人間を靈的に救済する事、これは大乘の教であり、今迄の誤れる総てのものを焼き盡し、真の教を布かれること。水の洗礼とは、人間を体的に救済すること。火は靈であり、水は体。……瑞靈の教は道義を超越して、愛のために愛し、真の爲めに真をなす絶対境、……某地の大火災を目して、火の洗礼だと人は云ふけれど、それは体的のものであるから水の洗礼である（「火の洗礼と水の洗礼』水鏡』。

かつてヨハネはヨルダン川で、水を以て下民に洗礼を施していた時、今後来るべき者は吾よりも大なる者である。そして吾は水を以て洗礼を施し、彼は火を以て洗礼を施すと予言していた。それは所謂キリストを指したのである。しかしキリストはヨハネより水の洗礼を受け、之より進んで天下に

向つて火の洗礼を施すべく準備していた時、天意によって、火の洗礼を施すに至らず、遂に十字架上の露と消えて了つたのである。……故に彼は再び地上に再臨して火の洗礼を施すべく誓つて昇天したのである（「水火訓』靈界物語 入蒙記』。

『ヨハネ伝』の第十二章二十四節のキリストの言葉、「一粒の麦もし地に落ちて死なずばただ一つにてあらん、死なば多くの実を結ぶべし」。真の神は宇宙の進化発展、生成化育を目指すもの。

麦を人と考えましよう。生成化育の過程において今迄の誤れる総てのものを焼き盡し、真の教を布かれる。その中で死すべき一粒の麦も逃さず救おう。それが出口聖師による火の洗礼、すなわち靈的救済なのだと思います。聖師の蒙古入り、アジア諸国からはじまる巡教は、それは型。実地にあつて

は、犠牲と靈的救済のうえに、アジア・アフリカ諸国は火と水の洗礼を通し、植民地の頸木から解放され独立していったのでしょか。そして、聖師の高熊山修行は良の金神が開化天皇のお引合せにより実現したもの(「大正八年一月二日神諭『神靈界』」であり、開化天皇こそ世界を統一される神様、出口聖師自身ではないかと考えます。

#### 開化天皇と饒速日尊

大毘毘の神の命のあれまさむ世は近づきぬこの地の上に

石の上ふるきゆかりのあらわれ  
て世人おどろく時近みかも(「開化天皇の御神業 朝嵐』新月の光 上巻」)

石上古事記は高光る天津日繼のしるべなりけり(「道歌』出口王仁三郎全集第七卷」)

最初の歌で大日日の神は開化天

皇、二首目「石の上」とは日本最古設立の神宮、石上神宮。同神宮の祭神は布留御魂大神、天靈十種 瑞宝に宿られる御靈威。石上神宮が饒速日尊を伝えながら「瑞宝の靈威」を祭神としているのは不思議。

なお天皇即位後の最初の新嘗祭である、大賞会前日の新暦十一月二十二日に催される石上神宮の鎮魂祭は、神武天皇の御代に初めて宮中に於いて行われ、以来勅命に依って毎年取り行われた国家の祭儀として存在しました。第十代崇神天皇の御代、御祭神が宮中から石上の地に御遷座になられたので、この鎮魂の祭儀も石上に於いて行われることとなり、これが国家のために行う本来の鎮魂祭でしたが、後世に至って宮中でも別に鎮魂祭を行うこととなった為に、憚りに鎮魂祭と称さず宮中の祭儀と区別して石上神宮鎮魂祭と



石上神宮 拝殿

名付けることとなりました。

武門の棟梁物部氏神が石上神宮。高御座山小幡神社主神、開化天皇は物部氏。物部氏の祖が饒速日尊。石上神宮の実際の御祭神饒速日尊が「天津日繼のしるべ」と三首目に詠まれていることは、示唆されるところが大きいと考えます。

真木柱は

天照大神(撞の御柱の神)

いつはりの殻脱ぎ捨てて、天地の真木の柱の道光るなり

古のいつはりごとのことごとくさらけ出さるる神の御代なり

(「開化天皇の御神業 朝嵐』新月の光 上巻」)

三首目の歌の「真木柱」とは天照大神(撞の御柱の神)です(「真木柱』霊界物語』六卷二十一章)。その天照大神の道は「いつわりの殻」に入っており、その古代の偽りがことごとくさらけ出される、神の時代が来たと示されています。

#### 第二の偽り

高姫の策謀「天の岩戸籠り」

天の岩戸開きの策謀。さて記紀神話でお馴染みの、天照大神の天の岩戸籠り「神楽舞」霊界物語』十五卷十章では、素戔嗚尊は父神伊弉諾大神から命じられた大海原の国(地球)を平定することができず、「大海原の国の治者をやめて、母のいる根の堅州国に行きたい」と申し出られる。伊弉諾大

神は怒り、大海原の国から素盞鳴尊を追放、素盞鳴尊は天教山の高原にいたる姉天照大神に別れを告げに行くが、姉は「素盞鳴尊が攻めてきた」と考えて迎え撃つため軍備を整えます。二神は誓約をして素盞鳴尊の清い心が証明される。

素盞鳴尊の部下の八十猛の神々はおさまらず乱暴狼藉を働いたので、天照大神は岩戸に隠れ、思兼神、天の鈿女命や手力男神

の力により、天照大神を岩戸から出します。この事変の責任を素盞鳴尊が負い、今までの海原の主神である顕要の地位を棄てて、一人旅で、国や島のあちこちにいる八岐大蛇、金狐、悪鬼の征服にむかうこととなりますが、「天照大神の天の岩戸籠り」の真の責任は何処にあるのでしょうか。ウラナイ教は八岐大蛇、金毛丸尾悪狐の立てたもので、大自在天を本尊とあおぎ、教主は日の出神の生き

宮と自称している高姫で、黒姫が補佐。高姫は変性男子の御血筋の肉体で変性男子の教えを守っています(『薯蕷汁』『靈界物語』十五卷九章)。

ここで高姫はウラナイ教の宗旨と、天照大神の天の岩戸籠りの真相を暴露。

「変性女子の霊や肉体を散り散りばらばらに致して血を啜り、骨を臼に搗いて粉となし、筋を集めて衣物に織り、血は酒にして呑み、毛は繩に縋ひ、再び此世に出て来ぬやうに致すのがウラナイ教の御宗旨だ。折角今迄骨を折つて天の磐戸隠れの騒動がおつ始まる所迄旨く漕ぎつけ、心地よや素盞鳴尊は罪もないのに高天原を放逐され、今は淋しき漂浪の一人旅、奴乞食のやうになつて、剥れし裸鳥、これから吾々の天下だ。此場に及んで何を愚図々々メソメソ騒ぐのだ」「婆々勇」『靈界物語』十

五卷十八章)。

「今迄骨を折つて天の磐戸隠れの騒動がおつ始まる所迄旨く漕ぎつけ」た計画、讒言、扇動の高姫の策謀。そして歴史は大過去、過去、未来へと進み、再び高姫が現れて……二度目の天の岩戸開きなども検証してみたいですね。

吾勝命は素盞鳴尊の御子

第一の偽りに戻ります。日本書紀の異伝二書では天照大神と素盞鳴尊の誓約で、素盞鳴尊の御統の玉から五(六)男神が生まれたとされています。五男神長男、正勝吾勝勝速日天忍穗耳尊は、素盞鳴尊が天照大神との誓約に勝った喜びから生まれた名前なので、素盞鳴尊の御子「私は八島主、五男神・熊野楠日神の別名)で御座います。貴使は噂に高き言依別の命様、遠路の処遙々能く御越し下さいました。吾父(素盞鳴大神)が

坐しましたならばどれ程喜ぶ事で御座いませう」「和と戦」『靈界物語』第十五卷二十二章)。

皇祖素盞鳴尊

「問 吾勝命は素盞鳴尊の御子と靈界物語には書いてありますが。答 吾勝命は素盞鳴尊の御子である。しかし天照大神の御子といっているから、これを言ううと日本の皇室が大変なことになるので、靈は天照大神、体は素盞鳴尊である。霊主体従だと言ってきた。本当は体が主で子供が生まれるのだから、体主霊従である。霊主体従といえは実は誰でもよいことになつて大変であるが、判らないからよいのである」「吾勝命は素盞鳴尊の御子」『新月の光下巻』。「皇祖素盞鳴尊の問題が一番やかましいことだから、王仁は十分に研究した。素盞鳴尊は変性女子で女で体の方の造り主である。誓



日本総社 津島神社

本の総社と崇め給いしなり」として、日本総社の号を奉つています。素盞鳴尊が真実の皇祖神。

饒速日尊と

吾勝命、大物主大神

約というのは天照大神は変性男子だから霊系であるから、いつまでも天照大神は父神父方で、素盞鳴尊が母神で母方である。皇室の御先祖は素盞鳴尊であると(宮内庁)星野輝興祭事課長の言うことは正しいが、あまり単純に言うから反対されるのだ、「皇祖素盞鳴尊」『新月の光 下巻』

天孫降臨神話とは、天照大神の孫である天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能邇邇芸命が、葦原中国平定を受けて、回国の統治のために降臨したという日本神話。天照大神と高木神は、天照大神の子である吾勝命に、「葦原中国平定が終わったので、以前に委任した通りに、天降つて回国を治めなさい」と言い、吾勝命は「天降りの準備をしている間に、子の邇邇芸命が生まれたので、この子を降すべきでしょう」と同尊を天降りさせた。そして邇邇芸命の兄とされているのが天火明命。籠神社で饒速日尊とされている神。ところが先代旧事本紀天神本紀で

は天祖御祖からこのとき天璽瑞宝十種を授かつて天降つたのは、天照国照、天火明、櫛鬘玉、饒速日尊なのです。天祖御祖は饒速日尊の御父神素盞鳴尊でしょうか。吾勝命が天降りしなかったというこれらの神話は『靈界物語』の見地からは否定されます。

アジアは葦原から転訛したのである。正勝吾勝といえればアジアという事になる。正勝吾勝勝速日天之忍穂耳命はアジアにおられたのであり、日出別神として活躍、天菩卑命は出雲から南洋(黄泉島)オーストラリアを支配され、天津日子根命は欧羅巴、活津日子根命はアフリカ、熊野久須毘命はアメリカを支配しておられたのである。五男神は五大州の人類の祖先である。この事を言わないうと世界統一はできぬのである(「五男神は五大州の先祖」『新月の光 上巻』)。

吾勝命は日出別神として活躍した、アジア大陸の人類の先祖。それは高天原から天降ることが前提。素盞鳴尊の御子神、大年神は饒速日尊『靈界物語』でアジアを統治された吾勝命が饒速日尊と同等である可能性がみえます。日出別命は日の出神の分霊とされており、饒速日尊が、天降つた吾勝命なのでしょうか。吾勝命の名は勝速日。饒速日と同様、ライジングサンを示唆します。饒速日尊の御子神が神武天皇の妻神伊須氣余理比売です。

吾勝命が饒速日尊であるなら、現在の皇室で饒速日尊の命日、十一月二十二日に鎮魂祭をされていることは自然。二十二は「王仁」に相応します。

第三の偽り 神々誕生の舞台

第三の偽り『靈界物語』と記紀との違いの一つは神々の誕生・活

躍の舞台『靈界物語』では神々誕生の舞台は筑紫の日向、太古の天教山、富士山の青木ヶ原とされています。

(場面は天教山) 神の御稜威も弥高く、恵みも深き和田の原、抜き出て立てる不二の山、雲を摩したる九山八海の、神の集まる青木ヶ原に……斯くの如く分掌の神を任せ給ひ、いやはてに左の御眼を洗ひ給ひて、天照大御神を生ませ給ひ、太陽界の主宰となし給ふ。次に右の御眼を洗ひ給ひて、月読命を生み給ひ、太陰界の主宰となし給ひ、いやはてに陰陽の火水を放ち給ひて、豊国姫の身魂を神格化して神素盞鳴尊と名づけ大海原の司に任せ給ふ。豊国姫命より神格化せる神素盞鳴尊の又の御名を本巻にては国大立命といふ。国大立命は四魂を分ちて、月照彦神、足真彦神、少彦名神、弘子彦神となり、現、神、幽の三

界に跨りて神業に参加し給ひつつあることは前巻既に述べたる所なり(「貴の御子」『靈界物語』十卷二十六章)。

これらの諸神人うち月照彦神は釈迦となつて衆生を濟度し仏教を弘布せしめ、また足真彦は達磨となつて禅道を弘布し、少彦名は幽界を遍歴、天地に上下し、天津神の命をうけ猶太に降誕して(キリストとして)天国の福音を地上に宣伝し、弘子彦司は遂に現代の支那に出生し、孔子と生れ、治国安民の大道を天下に弘布したりける(「諸教同根」『靈界物語』六卷



富士の樹海 太古の高天原 青木ヶ原

二十三章)。

太古の神々の舞台、世界宗教のルーツは九州ではなく富士山・青木ヶ原(阿波岐原)です。上述の文で、素盞鳴尊について、「陰陽の火水を放ち給ひて」とされ、鼻から生まれた」という記載がありません。素盞鳴尊は天照大神、月読命と誕生の仕方が異なります。

「眼」という文字は左に目、右に良。左目が天照大神を示し、右に「良」と、国常立尊、良の金神が坐します。天照大神は国常立尊の分身と聖師は示されています。

### 素盞鳴尊と「皇」の文字

『古事記』では黄泉国から帰った伊邪那岐命は筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原で裸祓をし、身につけた杖や帯、衣などを投げ捨てると、左目を洗ったときに天照大神、右目を注ぐと月読命、鼻を洗った時に素盞鳴尊が生まれます。

「はな」とは関西弁でも韓国語でも「はじめ」『大字典』(荣田猛猪)を、「皇」という文字で引くと、「もと」と自と王の合字」「自は鼻の本字で、鼻は人の始めて生じるとき、最も始めにできるところから、自を(はじめ)と訓じる。」「皇」は白十王でもあり、「白」は百から一を引いた九十九、究極の王という意味を兼ねています。「皇」とは「はじめの王、究極の王」を意味します。

穴太の隣町稗田野村の「古事記」の口述者 稗田阿礼は、素盞鳴尊が伊邪那岐尊の正当な継承者であるという事実をわかないよう隠し、後世に知られることを意図して素盞鳴尊が天照大神、月読命を超える第一の神、「ハナ」から生まれた神と表現したのでしよう。神素盞鳴尊の顕現である聖師は稗田阿礼の二代目でした(「花と花」『靈界物語』十七卷十二章参照)。

次号へ続く